短期語学留学生受け入れによる波及効果と今後の展望
—ミンダナオ国際大学生の受け入れを通して—

The Effect and Further Prospects by Accepting Short-term International Students
—Accepting of Mindanao Kokusai Daigaku Students—

清水和久
Kazuhisar SHIMIZU

（要旨）

提携校であるフィリピンのミンダナオ国際大学から本学に初めて日本語短期語学研究科6名を1ヵ月間受け入れた。留学生には、あらかじめ用意された日本語講座や日本文化交流会に参加してもらう内、本学の授業や、学生が独自に企画する交流会にも参加してもらった。留学生は英語の他に日本語も話すので、本学の学生との交流も活発に行われた。この1か月間の留学について、留学生及び留学生とかかわった日本の学生にアンケート調査を行った。その結果、留学生からは日本人に対する印象が良くなったという感想があり、日本の学生からは交流会や協働学習を通じて英語の必要性を強く感じ、フィリピンの学生の考え方やフィリピンの国に対してより興味を持ったという感想を得られた。わずかな期間の留学生の受け入れではあったが、日本の学生との交流経験を工夫することで、本学の学生が多くの影響を受けることができたので、留学生受け入れの効果が大変高かったことがわかった。

（キーワード）
国際交流、協働学習、短期語学留学

1 はじめに

グローバル人材の育成を目指し、在学中に海外留学のチャンスがあることをモールスポイントとする大学が多くなってきた。本大学においても、長期/短期語学留学制度が2年前からスタートしている。しかし、大学が学生を留学生として送り出すだけは日本大学側の費用の持ち出しとなるため、最終的には海外からも交換留学として学生を受け入れて授業料を相殺する形で提携することが望ましいと考える。しかし、日本の学生の留学目的が語学取得である場合にはどうしても、アメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリスなど費用が多くかかる欧米地域への留学希望が多く、費用が安くて済むアジア地域への希望は少ない。もっとも、これは当然で、英語を習うにはネイティブスピーカーがいる国に行くことは理にかなっている。逆に日本への留学希望は欧米地域からよりも、アジアの地域からのほうが多い。同等の交換留学を成立させて授業料相殺をねらうには、どちらの場合にもうまくいかない。

外国から留学生を呼ぶためには、単位互換を可能とし、日本の大学の授業が英語で行われ、日本語ができないでも授業を受けられる体制が必要である。ただし、外国から日本に来る留学生が日本語の習得を目指している場合にはこの限りではなく、日本語の講座や日本文化に関わる講座が準備されなければならないことになる。本学では、平成23年度から留学を前提とする新学部が立ち上がる予定であるが、そのために海外留学のための提携大学を求めている。できれば日本から行くだけではなくて、提携先からも学生を交換留学生として受け入れる必要がある。

筆者は、平成25年度に「国際ボランティア講座」を開講し、関連講座として平成25年9月に「国際ボランティア演習」をフィリピンで実施した。1主な活動は孤児院（ダバオリマニラ州）での活動であったが同時にダバオ市のミンダナオ国際大学（以下MKD）との交流もおこなった。この交流が翌年12月に本学はMKDと大学間交流提携を結び、平成26年2月には短期語学留学生を5名送り出している。また、同大学と連携交流プロジェクトである「アートマイル国際交流壁画制作プロジェクト」を実施、平成26年3月には共同で壁面を完成させている。

このような経験を経てMKDとは学生同士の交流を中心
に1年間交流を続けてきた。MKDは日本にいくつか提携大学を持っており、skypeによる交流や、語学留学の受け入れを行っている。しかし、これまでMKDから直接日本大学に日本語を学ぶための短期留学は実現していなかった。

今回MKDから1か月間の短期留学生を交換留学生として受け入れることとなった。今回受け入れにあたり、本学が受け入れる上での準備態勢や、本学の学生に対する波及効果、留学生自らの変容などについて言及する。なお、同時期にロシアからも留学生を受け入れているが、本研究では筆者が関わってきたMKDの留学生を研究対象とする。

2 研究の目的
MKDの学生との交流プログラムの概要と、それが日本学生との関連と、MKDの学生の意識の変化を明らかにする。研究対象は以下の2つの交流プログラムとする。

1）学術交流企画
2）国際ボランティア講座における協働学習

最後に今後の留学生受け入れにおいて有効な学生交流プログラムについて提言する。

2 研究の方法
2-1 受け入れプログラムの作成
プログラムは本学国際交流センターが中心となって計画。内容は午前の1留学生が日本語教育プログラム、その後2コマほど本大学の講義への参加である。その他、日本文化体験のための近隣県へ小旅行、日本の祭りへの参加、小学校訪問を中心としたプログラムとする。

2-2 SJP学生交流企画の内容とアンケート調査の実施
昨年からMKDと交流している「星稜ジャンププロジェクト」（SJP）の学生がMKDの学生との交流を企画。交流を希望する本学一学年学生に呼びかけ交流を実施する。

実施後、参加の学生とMKDの学生に対してアンケート調査を行う。
- 実施回数 5回
- 対象 MKDの学生6人 日本の学生13人
- 学生企画の内容

交流会は1回90分。予約制で行い、前半は仲良くなるためのゲームや話し合いをおこない、後半はMKDの学生と1対1の英会話をおくこと。

<table>
<thead>
<tr>
<th>表1 学生企画プログラム</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>回</td>
</tr>
<tr>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
</tr>
</tbody>
</table>

・アンケート内容

<table>
<thead>
<tr>
<th>表2 MKDの学生用アンケート項目</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>① 日本人との交流で変容したこと</td>
</tr>
<tr>
<td>② 良かった点</td>
</tr>
<tr>
<td>③ 企画した日本の学生に対する印象</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>表3 本学の学生に対するアンケート項目</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>① フィリピン人との交流で変容したこと</td>
</tr>
<tr>
<td>② 良かった点</td>
</tr>
<tr>
<td>③ フィリピンの学生に対する印象</td>
</tr>
<tr>
<td>④ 交流後の感想</td>
</tr>
</tbody>
</table>

2-3 国際ボランティア講座の実施とアンケート調査
国際ボランティア講座受講の学生は、講座後、国際ボランティア講座演習に参加し実際にフィリピン行き、MKDの学生と現地で交流することになる。講座においてフィリピンのことを事前に調べており、本交流は直接フィリピンのことを質問できるよい機会である。また「アートマイル国際交流壁画製作プロジェクト」を今後実施するため、模擬的にプロジェクトを授業において実施する。実際に下書きを作成し協力製作をおこなう。終了後、日本とMKDの学生にアンケート調査を行う。
- 授業回数 3回
- 対象 MKD学生6人 日本の学生19人

<table>
<thead>
<tr>
<th>表4 国際ボランティア講座での交流内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>講義の内容</td>
</tr>
<tr>
<td>1回目</td>
</tr>
<tr>
<td>自分たちが調べたフィリピンの情報について紹介し、不明点をMKDの学生に質問する。本学の学生は実際に9月にMKDに訪れるのでMKDの学生と話す機会は貴重である。</td>
</tr>
<tr>
<td>2回目</td>
</tr>
<tr>
<td>本来ネット上で話し合う内容を面接で事前に練習、お互いのアイデアを出し合って1つの形ある壁画の下書きとする。</td>
</tr>
<tr>
<td>3回目</td>
</tr>
<tr>
<td>下書きを完成させ、内容についての説明をパフォーマンス付きで発表する。</td>
</tr>
</tbody>
</table>
表5 日本の学生に対するアンケート項目

① 授業前のフィリピンのイメージ
② 授業後のフィリピンのイメージの変容
③ これからの自分が力を入れること
④ フィリピンについて新たにわかったこと
⑤ 授業において楽しかったこと
⑥ 全体の感想

3 研究の結果
3-1 受け入れプログラムの作成

表6 留学生受け入れプログラム

<table>
<thead>
<tr>
<th>18(月)</th>
<th>19(火)</th>
<th>20(水)</th>
<th>21(木)</th>
<th>22(金)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1. あいさつ</td>
<td>日本語</td>
<td>日本語</td>
<td>日本語</td>
<td>日本語</td>
</tr>
<tr>
<td>2. 校内紹介</td>
<td>文化体験</td>
<td>学生交流</td>
<td>金沢市内観光</td>
<td>SJP①</td>
</tr>
<tr>
<td>3. プレゼン</td>
<td>図書館</td>
<td>文化体験</td>
<td>授業参加</td>
<td>プレゼン</td>
</tr>
<tr>
<td>4. プレゼン</td>
<td>文化体験</td>
<td>授業参加</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5. ご挨拶</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

図1 受け入れプログラムの内容の割合

学生交流は全部で8回、そのうち5回がSJPが主催する会であった。また授業参加は9回でそのうち協働学習を行った国際ゼミ（国際ボランティア講座）は3回であった。以下SJP主催の学生交流に、筆者が行った国際ボランティア講座についてのアンケート結果を示す。

3-2 SJP学生交流企画の結果

3-2-1 MKDの学生のアンケート結果（N=6）

① 日本人との交流で変わるところ（すべて記述）

A 交流することで、日本の人生と日本に対する見方を変えた。すべての人が自身の文化や言語を愛され、どれだけすばらしい国か気づくことができる。日本の人々をより深く理解できた。

B 日本人はとても冷たいと思っていた、でも友達になることで、その態度は恵まれたから来るものだと気づいた。日本人はとてもやさしくあたりがかった。

C 日本人はとてもシャイだと思っていたが会話が始まるときの生活できき話すほど親密な仲になった。

D とても親切でとても好意的だった。

E 日本の学生はシャイだと思っていても話してみるととてもフレンドリーだった。

F 最初は外国語に対して厳しく「冷たい」という印象があったが、個人のコミュニケーションを通じてその印象は消えた。日本人は親切で一緒にいくつきた。

② 良かった点

- 英語だけでなく文化についても話すことができたので楽しかった 2人。
- ゲームはおもしろかっただけも友好関係を深めることができた 3人。
③ 企画した日本の学生に対する印象

・ とても熱心に取組んでいる印象がある 3人
・ とても親切である 2人
・ 責任を持って活動をおもしろくしようとして 1人

3-2-2 日本の学生のアンケート結果（N=13）

①フィリピン人との交流で変容したこと

・ 外国に興味を持つようになった 6人
・ 英語を話すことに自信があった 5人
・ 積極的になった 1人
・ その他 1人

② 良かった点

・ ゲームを通じてコミュニケーションがとれた 4人
・ 身振り手振りで伝えられた 2人
・ フィリピンに詳しくなった 2人
・ 1対1の会話で仲良くなれた 2人
・ その他 3人

③ フィリピンの学生に対する印象

・ 人がとても親しみやすい 9人
・ いい意味で変化なし 2人
・ その他 2人

④ 交流しての感想

・ 英語の必要性をとても感じた 4人
・ これまでにない経験で視野が広くなった 4人
・ とても新鮮で楽しかった 2人
・ 日本のアニメの人気があることがわかった 1人

3-2-3 アンケート結果の分析

MKDの学生の日本人に対する印象の変化が大きく感じられる。これは学生企画の交流だけの印象ではないと思われるが、MKDの学生は日本語や日本文化をフィリピンで学んできたことはあるが、日本人に対する印象は外見的な表現力のなさからイメージ的にはあまりよくなかったと思われる。しかし実際に日本人と1対1で交流することでその印象が変わった事がわかる。

また、過去においてフィリピンは日本に4年間占領されていた時代があった。MKDが位置するダバオには戦前2万万人の日本人が住んでいた。そのためフィリピンには日系2世が多い。日系2世は日本の戦争で負けた後、迫害の対象となり破滅的な困難に追い込まれた。

日系2世の世代になり、経済的に豊かな日本で働くチャンスに恵まれ、経済的地位も上がりつつある。しかし日本人に対して良い印象を持たないフィリピン人がいる中で育ったMKDの学生もいるため、今回の留学で日本人に対する見方が変わったとすれば交換留学の1つの成果といえる。

一方本学の学生にとっては、MKDの学生と1対1で英会話をおこなったり、ゲームで交流したりすることで、外国人とコミュニケーションをとることに自信を持てるようになった。また、フィリピンに対しての興味も増している。それはMKDの学生がとても社交的であり、観光が楽しむことも多いが、外人に交流しやすいことにも関係している。

実際に外国人と個人的に交流することで英語の必要性を感じ、視野が広くなったと感じている学生が多い。これは外国人と交流すれば当たり前のものであるが、このことに大学で気がついたということはこれまで外国人との個人的な交流の機会がありなかったことを意味している。

このことから外国人の留学生を本学に受け入れる事の必要性を感じることができる。

3-3 国際ボランティア講座の実施とアンケート調査

大学の授業「国際ボランティア講座」にMKDの学生が参加。MKDの学生を1人ずつ含む6つのグループで絵の原画を考え作業学習を実施。授業後に、日本の学生に対してアンケート調査を行った。

3-3-1 作成した壁画の作品

表7 6つのチームの壁画のテーマと解説

<table>
<thead>
<tr>
<th>チーム</th>
<th>テーマ</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>A</td>
<td>日本とフィリピンの子ども未来</td>
<td>フィリピンと日本のこどもたちを両国のおとこが手を伸ばして高めることから発想。芸術を通じて寛容さを育てる子ども未来の描く。</td>
</tr>
<tr>
<td>B</td>
<td>手つなごう</td>
<td>太陽に向かって歩く子ども達を眺め未来に向けて進んでいることを表している。各国で代表される動物や果物で図画を、衣装の場で締め、手をつなぐことで共感を表現している。</td>
</tr>
<tr>
<td>C</td>
<td>ISLAND</td>
<td>同じ島国アールという特徴を生かして、両国が手をつなぐ願望を示し、暖かい歓迎を共にすることを表す。また協力することで平和や愛、友情を生む。</td>
</tr>
<tr>
<td>D</td>
<td>The best thing in life is happiness.</td>
<td>お祭りは伝統的な喜び。互いの笑顔を通じて幸福な気持ちになる。</td>
</tr>
<tr>
<td>E</td>
<td>みんなと空の下</td>
<td>親子に絵絵を描く。手をつなげてがんばっていこうと言う事を表している。</td>
</tr>
</tbody>
</table>
| F      | ハーモニー | 両国の国旗をモチーフにし、互いの国を描いた絵。

図2 Bチームの作品「手つなごう」
図3 Eチームの作品「みんなと空の下」

互いの国を象徴する動物や果物等が対比的に描かれている。絵が苦手な学生も作画の時にはタブレットPCで画像を模索しながら描いていた。右側が日本で富士山を掲げ、左側はフィリピンで有名なアポ山を描いている。壁画のデザインはこのように対称的になることが多い。（Bチーム）

MKDの学生は時間に厳しく日本人のイメージを時計に例え、鳥居と扇子と共に右側に描いている。一方日本的学生はフィリピンのイメージをバナナに例え、キリスト教の十字架とモンキーと共に左側に描いている。相手の国のことを互いに描くと相手の国に対して持っているイメージがわかっておもしろい。（Eチーム）

このような国が違い、文化的な背景の違いする学生同士がアイデアを出し合って英語を使いながら一つの作品を作りあうことで協力する楽しさと達成感を味わうことをねらいとした活動を行った。

3-3-2 日本人に対するアンケート調査の結果

(n=19 重複回答あり）

① 授業前のフィリピンのイメージ

| バナナの栽培 | 4人 |
| 経済格差がある | 4人 |
| 日本の占領地 | 1人 |
| 観光地がない | 1人 |
| 無回答 | 8人 |

② 授業後のフィリピンのイメージ（人、国に対して）

○フィリピン人に対して

| フレンドリーで積極的 | 9人 |
| 日本のことをよく知っている | 5人 |
| 語学力がある | 2人 |
| 小柄人が多い | 1人 |

○フィリピンの国に対して

| 自然が豊かで観光地が多い | 2人 |
| みんなスマフォを持っていて発展している | 2人 |
| アジアだけど日本と文化が異なる | 1人 |

③ これから自分が力を入れたいこと

| 英字をつける | 14人 |
| 日本の文化を調べるようになる | 9人 |
| パフォーマンスとしての特技を持つ | 4人 |
| 積極性を持つ | 4人 |
| フィリピンについてもっと知る | 3人 |
| 笑顔で対応する | 3人 |

④ フィリピンについて理解したこと

| 伝統文化 | 8人 |
| 食文化 | 4人 |
| 祭り | 2人 |
| 衣服 | 2人 |
| 治安 | 2人 |
| 自然/観光地 | 2人 |
| 宗教 | 1人 |

⑤ 授業において楽しかったこと

| 文化の違う相手といっしょに考え、形にすること | 12人 |
| アイデアを出し合うところ | 2人 |

⑥ その他の懸念（抜粋）

・「メンバーで協力しながら１つの作品を作り上げていくことがこんなに楽しいとは思っていなかった。互いの国を理解しながら仲も深められるというのがすばらしいところだと思います。またこのような機会があればやってみたい。」（A子）

・「外国人の人としっかり交流したのが初めてだったこともあり戸惑うことや思いを伝えきれなかったりしたことがある。悔いはあるけれど授業はとても楽しく貴重な体験ができました。アートマイルは最初はとうむかいかと思ったけどみんなで話し合い、楽しくよい物が作れたのでよかったと思う。」（B子）

・「交流を通して知らないことがたくさんあるとわかっただった。他の国の人とコミュニケーションをとることが自信につながると感じた。」（C男）

・「グループの人と仲が深まって楽しかった。絵でみんなつながるということはすばらしいことだと思う。もっと続けていたい。」（D子）

MKDの学生と3回の授業で作品を仕上げたわけであるが、授業前には日本の学生はフィリピンに対しては、バナナや経済的に貧困であるというイメージしか持っていなかった。しかし授業後は、まずMKDの学生と話しあうこととその積極的で明るい人柄に惹かれる。彼女たちの英
語は発音もきれいでわかりやすい。アルバイトとしてskypeなどをつかって日本人に英語を教える学生もありつつのことであった。それに歌を踊りを上手く何事に対しても積極的である。その人物からの情報なのでフィリピンの国に対してとても良いイメージを日本の学生は持っている。

また、③の「これから自分が力を入れたいこと」をみるとMKDの学生との交流を通じて良い影響を受けていることがわかる。英語の必要性や国際文化を語る事の重要性に気づき、アピール力などもつけたいと思っている。MKDの学生は日本の事をよく知っており、6月頃に話題となっていた集団的自衛権について「憲法9条との兼ね合いについてどのように考えか」という質問を日本の学生にするくらいであった。

次に壁画の構図を通じてフィリピンの文化についてもたくさん学び、知識が増えている。これは異文化理解として大切である。

最後に何よりも学生の評価が高かったのが、MKDの学生と共同でアイディアを出し合いながら1つの作品をつくるプロセスであった。まったくの異文化を背景とする相手と話し合い、建設的合意点を見いだして1つ作品にすると言うことはとても高い達成感を感じることができると思われる。その他の感想の所でも作品を完成させたことに言及している感想に誇得意がある。

4 まとめ

今後はグローバル人材の育成を考える上で、日本の学生が海外に留学することが有効であることに変わりはないが、逆に留学生を受け入れる事でも本学の学生に与える効果が大きいことがわかった。留学生自身の日本語能力の向上と日本文化的理解はもちろん重要であるが、本学の学生と関わりをつくることでさらなる効果が期待できる。この場合の関わり方として第1にパーソナルな交流ができること、第2にグループで協力して達成感を味わえる活動があることの2つの要素が必要であることがわかった。

今回、アンケート調査を行ったが、学生の交流企画と、筆者自身の授業であった。ここから考察すると、1つ目の学生の交流企画は1対1で行う英会話がセットされていたため、参加した学生は直接留学生と十分話すことができ、何かと問題をたたきあわせよう努力した。そのため、満足度は極めて高く、英語の必要性を身もって感じることができたはずである。留学生が英語に堪能な場合、それだけで本学の学生にとっては魅力のあるものとなる。英語の上達に役立つ面もあるが、コミュニケーションの手段としての共通語の意味理解できることになるからである。

2つ目の「グループで協力して達成感を味わえる活動」であるが、留学生と日本の学生が力を合わせなければならない調査、話し合い活動やプレゼンテーション活動を組み込むことで外国の学生と力を合わせることの重要性を学び、可視化できる成果物を作成することで達成感を味わうことができる。これがまさに交流の醍醐味であろう。

以上の2つの要素を盛り込んだ交流を日本の学生との間に仕組むことによって本学の学生に英語の必要性を感じさせるとともに、外国に目を向けることの重要性を理解させることが可能になる。

留学生と交流させる仕組みを上手く作ることによって、本学の学生への波及効果を高めることが可能となる。

最後に、会ったときだけでなく、その前後にその当事者と関係におけるプロジェクトをばらめておくとさらに会ったときの効果、その後の効果が高くなる。今後もMKDとの交換留学を続け、さらにフィリピンにおける授業校を増やし、たくさんの交換留学生を本校に呼び、本学の学生に海外に目を向けられるチャンスを増やしていきたい。

注

(1) 国際ボランティア活動開発の意義と実際の展開 —フィリピン国際ボランティア演習を通じて— 清水和久 金沢大学人間科学 第7巻第2号pp.29-37
(2) ジャパンアートマイル http://www.artristle.jp/
(3) ハボン —フィリピン日系人の長い戦後— 大野俊 第3書館 1991.8

参考文献

文部科学省平成21年度国際開発協力サポートセンター・プロジェクト グローバル人材育成のための大学教育プログラムに